

二階堂

トクヨ

—女子体育を広めて—



教え子と二階堂トクヨ
(学校法人 二階堂学園 日本女子体育大学蔵)

明治三十七（一九〇四）年、二階堂トクヨは、希望に胸をふくらませ、石川県立高等女学校に着任しました。しかし、体育を教えることを命じられ、大きなショックを受けました。学生時代、和歌と読書に夢中だったトクヨは、大好きな国語を教えることを楽しみにしていたからです。号令に合わせてただ体を動かす体育は、トクヨが一番きらいな教科でした。

しかし、教員になったからには、きらいだと言ってはいただけません。しかたなく体育の教員として、指導を始めました。ところが、三か月ほどたったころ、不思議なことに気づきました。運動をすることで、体が弱かった自分が健康で活発になっていったのです。毎日の運動の効果を自分の体で体験してから、トクヨは進んで講習会に参加し、熱心に体育を勉強するようになりました。体操の専門学校出身の外国人宣教師に出会い、ヨーロッパで教えられている女学生用の体操を習うこともできました。一方、休日や夏休み・冬休みは、自分が覚えた体操を他の学校の先生たちに教えることにも力を入れました。いつしかトクヨは、体育の指導力を多くの人に認められるようになっていました。

明治四十四（一九一）年、トクヨは、東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）の助教授になりました。そして、翌年留学生に選ばれイギリスに向かいました。体育ぎらいだったトクヨが、日本の女子体育の未来を背負うことになったのです。

トクヨの留学先は、マダム・オスターバークが校長を務める名門キングスフィールド体操専門学校

体操の専門学校：
当時外国では、体育の教師を育てるのは、体操の専門学校であった。

宣教師：
キリスト教の教えを伝える牧師。

助教授：
大学の先生。

でした。

「わざわざ日本から、助教授が留学生としてやってきた。」

トクヨを迎えた先生たちは、すでに助教授の資格をもっているトクヨに対して、何を教えればいいのか困ったといえます。そのためマダム・オスターバーグの提案により、トクヨの実力を確かめるためのテストが行われました。「水泳を知っていますか。」「ホッケーやラクロスを知っていますか。」「ダンスを知っていますか。」「マッサージを知っていますか。」「トクヨは次々と向けられる質問に、すべて「知りません。」と答えるしかありませんでした。当時の日本の体育の授業は、先生の号令に合わせて、ただ体を動かすというもので、トクヨもそれ以外の知識はもっていなかったのです。

結果はすべて0点。トクヨは、あきれ顔の先生たちにこう言われました。

「いったい、あなたは生徒に何を教えていたのですか。」

トクヨは、黙ったままくちびるをかみしめました。

キングスフィールド体操専門学校での生活は、驚きの連続でした。寄宿舎の部屋はホテルのようにきれいで、そうじしてくれる専門のスタッフまでいるのです。しっかりした体を作るために、午後のおやつや夜食をふくめ、食事は一日五回もとるようになりました。また、動きやすいように工夫されたチュニックという制服も準備されていました。生活のすべてが、よりよく運動するために工夫されていたのです。

トクヨは、このような恵まれた環境の中で、できるだけ多くの運動を学ぼうと思いました。他の生徒の何倍も練習に打ちこみました。特に、水泳の上達ぶりは、まわりが驚くほどでした。実はトクヨは「水泳の練習は一日一回、三〇分」という水泳の授業のきまりをこっそりやぶり、一日三時間以上も練習していたのです。きまりをやぶっていることを知った水泳の先生は怒って、こう言いました。

寄宿舎：

学生がいつしよに生活をする場所。

チュニック：

女性の上着で、長さが腰からひざくらいのもの。ここでは、写真にある上着で運動着とした。

「きまりを守れないなら、水泳の成績を0点にしますよ。」

それに対して、トクヨはきっぱりこう言い切りました。

「わたしが望んでいるのは、水泳の成績ではなく、泳ぎをマスターすることです。わたしには時間のゆとりはありません。水泳以外にも覚えたいことがたくさんあります。早くマスターしたいのです。」

トクヨの熱意に負けた先生は、好きなだけ泳いでいいという許可をあたえました。

トクヨはこの他にも、クリケットやラクロス、ダンスなどたくさんスポーツに触れました。自分たちで作戦を考えたり声をかけ合ったりする運動は楽しく、時間を忘れて体を動かしました。トクヨは、この「運動の楽しさ」を日本の人たちにも伝えたいという思いをもつようになりました。

留学して一年がたったころには、トクヨはキングスフィールド体操専門学校で教えられたことをほとんどマスターしていました。わずか一年の間の成長ぶりに驚き、「天才だ」とトクヨをほめる教授もいたほどでした。しかし、自分が天才でないことはトクヨ自身が一番よく知っていました。

このころからトクヨは、自分の後にくる者たちには同じ苦勞をさせたくないという思いを強くしていました。そのために、日本に帰ったら女子の体操専門学校をつくらうと決意したのです。

大正四（一九一五）年に帰国したトクヨは、女性の体育の先生を育てるための国立の専門学校の必要性をうたえ、国に専門学校をつくることを要望しました。しかし、実現はしませんでした。そこで、トクヨは自ら学校をつくることにしたのです。



イギリスの体育の授業（体操）
（学校法人 二階堂学園 日本女子体育大学蔵）

開校までには多くの困難がありました。困難にぶつかるたびに、「知りません」としか答えられなかったころの自分を思い出し、のりこえたのです。

トクヨが「二階堂体操塾（現在の日本女子体育大学）」を開いたのは、帰国してから七年目の大正十一（一九二二）年、四十二歳のことでした。トクヨは、「運動の楽しさ」を教えることができる教員を育てるために、「二階堂体操塾」での授業や寮の生活に、イギリスで学んだことをできるだけ取り入れました。

開校して間もなく、トクヨは、真新しい日本製のチュニックを着た生徒たちに、こう宣言したのです。

「この学校では、チャイムが鳴りません。出席簿もありません。何の資格も取れません。しかし、体育の教員としての指導力をつけて卒業させることだけは、わたしが責任をもちます。」

このときトクヨは、自分を見つめる生徒たちの真剣なひとみの中に、日本の女子体育の未来を見ていました。一年後、ほとんどの生徒が体育教師となり、トクヨのもとを巣立っていきました。彼女たちは日本各地の学校で、トクヨに学んだ「楽しい体育」を広めていったのです。

二階堂 トクヨ

二階堂トクヨは、明治十三（一八八〇）年に、現在の大崎市三本木の農家に生まれた。助教としての二年間のイギリス留学で、「心身ともに健康な女性を育てる」ということを学んだ。帰国後、現在の日本女子体育大学の前身である「二階堂体操塾」を開設し、女子体育の基礎を築いた。



二階堂体操塾の平均台運動
(学校法人 二階堂学園 日本女子体育大学蔵)